



正師を得ざれば学ばざるに如かず

富山県中学校長会
会長 牧田 康博

先日、アフリカなどで寄生虫が引き起こす熱帯感染症の治療に大きな効果を上げる特効薬を開発したことにより、平成27年にノーベル生理学・医学賞を受賞された北里大学特別栄誉教授大村智先生（以下「先生」）の講演を拝聴する機会がありました。

講演では、子供の頃の様子や工業高校の定時制で教員として勤務しながら大学院でも勉強されたこと、研究への取り組みと成果、授賞式の様子などについてお話いただきました。先生の表情や姿勢、軽妙な語り口や話の内容から何とも言えない人間的な魅力が伝わってきて、あっという間に時間が過ぎました。その中で私にとって特に印象深かったことについて2点紹介します。

1 「よくやった、よくやった。」

先生は、山梨県の中農の家庭に5人兄弟の長男として生まれ、子供の頃は活発でけんかや農作業の手伝いに明け暮れたとのことでした。お母さんは小学校の先生として忙しかったことからおばあちゃん子として育ったそうです。「勉強しろと言われたことはありませんが、祖母から『自分のことより人のために役立つことを考えなさい。』と繰り返し聞かされました。今でも私の心に残っています。人生の岐路に立った時は、このことを基に判断するようになってきました。」そして、「祖母はずいぶん前に亡くなりましたが、もし今回の受賞のことを知るようなことがあったら、『よくやった、よくやった。』と喜んでくれると思います。かつて何かあるとそう言って喜んでくれましたから。」と当時を振り返られました。

大人がきちんと子供に向き合い、人としての生き方・あり方や願いなどについて語り聞かせること、そして、支え認めること、こうしたことによって簡単に揺らぐことのない拠り所、強さともいべきものが育ち、多様な人々と共働しながら困難を乗り越えていける人に成長するのではないかとの思いを強くしました。

2 「教師の資格は自分自身が絶えず進歩していることである。」

これは、子供の頃にふとのぞき見たお母さんの日記に書かれていた言葉だそうです。「高校の夜間部の教師を経て研究者となった私の支えになりました。そして、この言葉を胸に刻んで自分自身が成長し、それを見せることで高校や大学院、研究所等で生徒や研究者を指導してきました。」と述べられました。

今、高大接続改革や学習指導要領の改正が進められ、学校には授業改善が求められています。私たち教員にとって、それぞれこれまで培ってきた授業スタイルがあり、これを一朝一夕に変えることは簡単なことではありません。それでも、子供たちが予測困難な未来社会を立派に生き抜いていける力を身に付けることができるよう、努力を続けることが大事であり、そうした努力を惜しまない教員にこそ子供たちは教わりたいのではないかと思います。

「正師を得ざれば学ばざるに如かず」このことを強く感じさせられた、たいへん貴重な講演でした。このような機会を与えられたことに感謝しています。